氏　　名	YIN　MOE　THET
授与した学位	博　士
専攻分野の名称	文　学
学位授与番号	博甲第 6678 号
学位授与の日付	2022 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 （学位規則４条第１項該当）
学位論文題目	ミャンマー語の指示詞の研究 ―現場指示用法・文脈照応用法の特徴を中心に―
学位論文審査委員	教授　宮崎　和人　　教授　栗林　裕 准教授　堤　良一　　准教授　片桐　真澄

学位論文内容の要旨

Yin Moe Thet 氏の学位論文は、現代ミャンマー語の指示詞を、母語話者の直観および調査に基づいて、現場指示用法、文脈指示用法について記述的にまとめた論考である。論文は 8 章で構成されており、第 1 章で本論の目的と論文の構成、第 2 章で先行研究の概観と問題点の指摘、第 3 章～第 5 章は現場指示用法に関する記述、第 6 章は文脈照応用法の記述、第 7 章は残された問題の現象の指摘と問題提起、第 8 章がまとめと結論となっている。

これまでのミャンマー語の研究では、ミャンマー語の指示詞は形態素および語構成の観点から 2 種類の基本的な指示詞が認められ、そこに他の要素が付いて異なる範囲を指すと考えられてきた。しかしながら、これらの研究は母語話者のものではなく、多くは言語学が進んだ英語圏や日本の研究者によるものであった。氏は、ミャンマー語では、たとえ歴史的な発達の観点から二種に収斂するとしても、現代の母語話者の直観からは 4 種類の指示詞を認めるべきであることを主張した。その 4 種類は大きく、距離の遠近で対立する dī, hòká と、話者と聞き手の注意を調整する機能で対立する ɛ̀dī, hō の 2 種が対立するとされる。

まず、氏はこれらの指示詞について、それぞれが他の指示詞では置き換えられない場合があることを示し、そのことによって 4 種の指示詞の存在を認めるべきだと主張する。しかし、ɛ̀dī と hō では、従来の距離区分的な考察では両者の違いを明確にできないために、昨今の世界の言語学で用いられる、共同注意（joint attention）に基づいた分析を提案した。氏が行った調査によると、話し手と聞き手が共同注意を確立している場合としていない場合を設定して、もっとも使用されやすい指示詞を選択してもらったところ、共同注意が確立されている場合には ɛ̀dī、そうでない場合には hō が用いられることが明らかになった。これは、先行研究にはなかった視点であり、これまでの研究ではうまく説明できなかったような現象を捉えることに成功している。

次に、氏は遠くを指す hō, hòká の違いについては「明瞭性」という概念を用いての説明を試みている。これは通言語的な研究において visibility（見えるか見えないか）として捉えられているものの下位概念と捉えられる。ここでは氏は実際のミャンマー語での会話を紹介し、「遠くにあるがはっきりと見える対象」と、「それほど遠くはないが、はっきり見えない、あるいは同じ物が複数あって、どれを指しているのかが明確ではない」場合とで hòká と hō が使い分けられていることを明らかにした。また、ミャンマー語の hòká は、目線よりも上にある対象も指すことが指摘されており、これは elevation という概念で捉えられている意味の存在を、ミャンマー語において見いだしたことになる。

また、氏は現場指示用法において共同注意を表す指示詞が、文脈照応用法に用いられるということも、通言語的に言われることであるが、ミャンマー語でもそのようであることを指摘している。その上で、先行詞を繰り返すような場合は共同注意がある ɛ̀dī が、そうでない場合は hō が用いられることを、データを提示しながら説得的に論じている。

以上のように、ミャンマー語の指示詞がどのように用いられているかを、広範なデータに基づいて記述した研究はほとんど例がなく、またあったとしても共同注意、明瞭性などの最新の知見に基づいたものではなかった。そのような意味において、氏の研究は世界の言語における指示詞の研究に対して貴重な資料を提供するとともに、十分な貢献をなす考察がなされたものであると評価することができる。

学位論文審査結果の要旨

審査会は 2022 年 1 月 17 日 10：00～12：00　2－2 演習室において行われた。審査は主査である堤良一、副査である宮崎和人教授、栗林裕教授、そして、専門分野に関係のある学術領域の本学教員として、片桐真澄准教授の 4 名で行った。

まず、全体的な講評として、予備論文で修正すべきであると指摘された点が、適切に、かつ丁寧に修正されており、全体的に完成度の高い、読みやすいものとなっている点が、すべての審査員により高く評価された。特に、それぞれの章で残された問題が、あとに続く章のリサーチクエスチョンになるように、有機的に配置されており、全体として一つの流れのある研究となっている点が高評価であった。また、予備論文後に新たに実証的な調査を行った部分では、コロナの影響で対面での実験ができない中、絵を用いて母語話者の内省を問うことで問題を解決するように工夫されており、研究者としての成長が見られた。

一方で、次のような問題点が指摘された。まず本論は記述的な考察にとどまっており、指示詞の理論的な考察に至っていない。指示詞を 4 項対立として立てることはよいが、その 4 項の関係が必ずしも明示的には論じられていない。歴史的な観点からの考察が必要なのではないか。指示詞以外の言語現象と照らし合わせるような視点が必要だったのではないか。結論のところで提示された図は、ミャンマー語の指示詞のあり方を単純化しすぎているのではないか。後半の 2 つの章の存在が、前半との整合性を損なわせているようにも読める。

これらの批判に対して、審査会では申請者から一つひとつ回答があった。指摘された問題から逃げることなく、正面から答えようとする姿勢が見られた。

上記のような問題があるにせよ、それらが冒頭で紹介した、本論の発見と考察を損ねるようなものではなく、本論が全体として、博士学位取得論文としての一定の水準を超えていることを審査委員全員で確認した。また、業績についても、国際大会、全国学会での発表、査読付き論文への掲載が決定していることから、学外においても一定の活躍をしていると認めた。

以上により、審査会では Yin Moe Thet 氏の博士論文を全会一致で合格と判定した。